

「高崎映画物語」レジュメ

映画のまち・高崎は、いかにして育まれたのか

1. 高崎の文化的土壌

- ・ 井上保三郎・井上房一郎らによる「文化都市」構想
- ・ 群馬交響楽団の設立（日本初の地方オーケストラ）
- ・ 群馬音楽センター建設
- ・ 市民寄付による文化支援の伝統

→ 「文化を市民が支えるまち」の形成

2. 映画のまちの原点

映画『ここに泉あり』（1955）

- ・ 群馬交響楽団を題材
- ・ 高崎を中心に群馬県内にてロケ・地域協力型映画制作
- ・ 高崎市出身 市川喜一プロデューサーの存在
- ・ “地元で、地元を描く映画”という先駆的試み

→ 日本最初期の「ご当地映画」としての位置付け

→ フィルム・コミッション的発想の原点

3. 映画文化の広がり

- ・ 映画の成功を契機に文化活動が活性化

- 名曲喫茶「あすなろ」誕生
- 「音楽モデル県」指定
- 群馬音楽センター建設へ

→ 映画が地域文化を育てる循環

4. 高崎映画祭の誕生(1987～)

「観たい映画を地方でも観たい」

- 市民自主上映活動からスタート
- 行政・企業・映画館が連携
- 地域映画文化の創出
- 全国有数の映画祭へ発展

高崎の特徴

- 市民活動と行政の協働
 - 「支援するが内容に介入しない」文化
-

5. シネマテークたかさき設立

- 映画会社直営館が撤退し、シネマコンプレックスが台頭してくる時代に
- 高崎でも既存館が消滅
- 2004 年 NPO 法人たかさきコミュニティシネマ設立
- 市民出資型映画館「シネマテークたかさき」開館

→ 地域に根ざした映画館づくり

6. 映画の入口から出口まで

入り口の最たるもの—高崎フィルム・コミッション

- 撮影誘致
- 制作支援
- 映画製作参加

出口 お客様に届ける上映の場

場や文化の継承

- 高崎映画祭
- シネマテークたかさき
- 高崎電気館再生
- 35mm フィルム文化継承

→ 「作る・観る・残す」を地域で支える

7. 現在の高崎

- 映画制作支援の継続
 - 若手監督支援
 - 地域文化資源として映画を活用
 - 「映画のある街」から「映画のまち」へ
-

まとめ

高崎の映画文化を支えたもの

- 市民の自主性
- 行政との協働
- 文化を大切にする土壌
- 映画を“まちの財産”として育てる姿勢

「映画のまち 高崎」は、

人々の積み重ねによって作られてきた文化の物語である。